Uの群像

夏木康志

目次

承前:U 構想 1
レジェンド・パンサー 2
カルロス藤原 3
南条彰 4
高崎信長 5
黒崎聖 6
カズ難波 7
ショーン誠 8
あとがき 9

目次

承前:U 構想

日本のプロレス界を担う二代巨塔。アントニウス石原とバーバリアン正明が外国人のスカウト一本化を目指して作った実験的な格闘技団体 U。この手記は、その歴史に迫るフィクションである。

それは誰だって、誰の挑戦も受けると断言したアントニウス石原と、かつてはタッグまで組んでいた日本の巨塔バーバリアン正明とどちらが強いかは、永遠の疑問だ。

でも、一般に両者とも全盛期でガチファイトをするならば、一方は普通の人よりアゴが長い最強の男と、一方は普通の人の倍は足が長いという最強の男がぶつかれば、前蹴り（ フロンタル ）による KO という決着が想定できる。さらに、もちろん両団体が交流戦を開くとなれば、一勝一敗一分けが基本で、さらに、両団体の経済力や当時のテレビ局のスポンサー事情によって勝敗が決まることは、想像に難くない。

その両者が、最終決戦の舞台として用意した U、当初の登録選手にはもちろんアントニウス石原もバーバリアン正明も含まれていた。

誰が一番強いのか、共通のルールではっきりしよう！ このコンセプトこそが、U スタイルであった。

それまでの某業界は、ドリームマッチの決着は両者リングアウトや乱入だった。それは商品価値が敗北によって決まるのであれば、曖昧決着はやむを得ない。

しかし、本来のリアルファイトの商品価値は勝敗ではなく、試合内容だ。クリーンファイトが行えるよう、ルールを整備すること。それが、本来の U の課題であった。

レジェンド・パンサー

劇画から飛び出した伝説のファイター、パンサーマスクは、ある突然、アントニウス石原のネオジャパンに辞表を突きつけると、マスクを脱いで、新興格闘技団体 U に入会した。そのファイトスタイルは、レスリングに本格的なキックボクシングの技術を導入したもので、総合格闘技の草分け的存在で、シュートスタイルレスリング、つまり相手を本気で倒しに行くレスリング（ 格闘術 ）の略称で、シューティングと呼ばれた。

パンサーマスクは３次元を越える異空間ファイトでリングを縦横無尽に飛び跳ね、最後はパンサースープレックスやパンサードライバーといったオリジナルの極め技でフィニッシュしていた。

もちろんパンサーもカルロス＝ゴーシュの弟子であり、初期の U では最も最強に近い男だ。

パンサーほどの人気を背負った選手が、マスクを脱いで、リアルファイトに目覚めた。もう飛び技は使わない。今までの技で、使えるのはキックやレスリングだけになっても、逆に強い。

U という実験の場において、カルロス藤原という対戦相手がいたことは、パンサーにとっても、良いことであった。

パンサーほどの使い手の技を全て受け止めた上で、関節技でフィニッシュするカルロス、プロレス界の神様の名を継承する男の名に相応しい男だ。

カルロス藤原

レスリングの神様、カルロス＝ゴージュに直接関節技の手ほどきを受けた前座の鬼、カルロス藤原は、メインイベンターを務めるにまで、人気が上昇していた。ところが、兄貴としたっていたアントニウス石原に、新興団体 U に派遣されることを誓約させられた。ここに関節技の鬼、カルロス藤原が、真の力を発揮する舞台が整った。

シューティングスタイルを主張するパンサーと、プロフェッショナルレスリングを主張するカルロスとの死闘が前期 U の歴史を作っていった。

まだ前期の U には完全なルールは存在しなかった。台本もルールも No Book な世界が、U だ。

倒れた相手を蹴ってはいけない。そんなルールもない代わりに、自分からギブアップしないファイターにレフリーストップもない。

俺は友達の肩を折ってしまった。

そんなカルロスの発言の裏には、関節技主体のグラウンドのカルロスがキックでダウンした際、なおもスタンドからのサッカーボールキックをやめないパンサーへの思いがあった。

それは、ボクも折られるのはいやなんですよ。あの試合はレフリーがいけない。試合をストップするべきでした。そしてそういうルールすらない初期の U にボクは嫌気がさしてきたんです。

でも、U がなかったら、ボクのシューティングは、世界のシュートに成長することはなかったでしょうね。

とはパンサーの２０年後の発言である。彼こそが、現役レスラーでは最強の男、レジェンド・パンサーである。

南条彰

少林寺流カラテの使い手、南条彰は生活のため、ネオジャパンでレスラーをやっていた。ところが、社長のアントニウス石原から、新興格闘技団体 U への入会を依頼される。

ここにキックと関節技、スープレックスの 3 つの技、打投極の 3 極を象徴する伝説の 3 人が U に集うことになる。そして U スタイルナンバーワン決定戦が三たび開催される。

初代 U スタイルナンバーワンはレジェンド・パンサーだった。そして第二代 U スタイルナンバーワンはもちろん U の象徴である南条彰だ。ところが、南条とパンサーの熾烈な抗争は両者の決裂という最悪の形で終了した。真の総合格闘家を目指したパンサーと仲間を食べて行かせることを選択した南条。南条は U の仲間を守るために古巣のネオジャパンに戻る決意をした。

ネオジャパンの中で開かれた最後の U スタイルナンバーワン決定戦で優勝したカルロス藤原は、アントニウス石原に世界最強の座を掛けて挑むが、石原の反則攻撃の前に、敗北する。ここに U の最初の悲劇が起こった。

カルロスが敗れた瞬間、石原の反則攻撃に激昂した南条は、リングに乱入して、アントニウス石原に背後からハイキックを行い、KO する。この事件で、U は再びネオジャパンを離れることになる。

ここに第二次 U が成立する。

南条彰こそが U の象徴である。

それはバックグラウンドが少林寺流カラテというマイナー競技であることを除けば、あの体格、あのマスクで圧倒的に恵まれた南条。天才という言葉は、パンサーマスクを除けば、南条のためにあった。

むしろ天賦の才、という言葉が相応しい。

U がムーブメントになった背景には、南条の貢献がある。

高崎信長

U の虚像と呼ばれることになる高崎信長は、第二次 U を代表する選手の一人だ。高崎は南条にはじめて勝利を得るなど、世界最強に最も近い男と呼ばれた。

プロフェッショナル・レスリング最強の名をほしいままにすると思われた彼であったが、一人の格闘家、ボイス・クレイジーに惨敗することで、彼は U の虚像と呼ばれることになる。

何度戦っても、腕ひしぎ逆十字であっさり負けてしまう彼。

しかし、高崎信長はそれまでの戦いで作った遺産で、格闘技業界でもショーレスリングへの原点回帰を目指し、高崎総統として、活躍した。

それは第三次 U、通称 U ワールドは、最もプロレス色の強い、U スタイルの団体だ。ネオジャパンとの交流戦で、オールドスクールレッグロックで敗れた彼。

しかし、彼の弟子には、圧倒的に優秀なものが多いのも事実である。

U が U の歴史を維持するための虚像として必要な男だ。

そして、パンサーが自分自身のことを、最強のパンサーのマスクを含めてフェイク（ 虚像 ）と言い切ったように、フェイクをフェイクとして気付かせないまま演じきった名優、それが高崎信長であった。

黒崎聖

黒崎聖はＵの救世主と呼ばれた男で、第三世代のＵスタイルの代表的使い手で、世界最強に最も近いと呼ばれた男の一人である。

ボイス・クレイジーに三たび惨敗した師の高崎信長の汚名を注ぎ、圧倒的な強さでクレイジー柔道の使い手を葬っていった。

赤いタイツで、第三次Ｕがネオジャパンと交流戦をした際も、ショースタイルとの一定の距離を保ち、実力を維持し続けた。

黒崎聖こそは、ジパングのＵの歴史の代表的継承者の名が相応しい人物だ。

黒崎の勝利の後にかかるテーマ、Ｕのテーマは、本来は彼の先輩の入場テーマだが、会場の一体感を圧倒的に与えてくれる名曲中の名曲である。

カズ難波

カズ難波は、レスリングベースで最も IQ が高いと呼ばれる至高の U スタイルの使い手だ。彼も、最終的にはプロフェッショナルレスリングに回帰するものの、クレイジー柔道の使い手を総合格闘技という彼らの土俵上で葬り去ってきた。

黒崎と難波、どちらか U スタイル最強かは、ファンにとっても永遠の疑問である。それが、アントニウス石原とバーバリアン正明との間の比較不能な命題ではなく、リアルな U スタイルで誰が実力ナンバーワンかは一度試合をすれば決まることだ。

しかし、彼らの功績は、すでに、U スタイルの選手がクレイジー柔道を総合戦で葬ってきたという事実だけで、十分である。

私はプロ練後の彼に実際に何度も遭遇したことがある。ライトヘビー級というよりは、ヘビー級のプロレスラーの身体付きである。彼の功績はもう一つの U である UFC でも殿堂入りしている。私の師匠を覗くと、最もクレイジー柔道と戦い、功績を挙げた日本人の戦士の一人である。

ショーン誠

現役のプロフェッショナルレスラーで、かつ最強のＵスタイルの使い手の一人との名声をほしいままにした男、それがショーン誠だ。誠は、確かにクレイジー柔道一族最強の男に敗れたが、後に、バーバリアン正明の残した団体、オールドジャパンのベルトを戴冠し、プロフェッショナルレスリングの歴史に名を刻んだ。オールドジャパンのベルトは相撲で頂点を極めた暁ですら、手に入れるのに数年をかけている。現代のＵスタイルナンバーワン決定戦には、欠くことのできない選手だ。

もしＵスタイルナンバーワン決定戦が厳しくても、パンサー＆誠組対カルロス＆黒崎組といったカードはＵスタイルファンにとって、絶好の試合になるだろう。

おそらくパンサーのコンディションが悪くない限りは、相当の好カードが期待できる。

あとがき

U スタイルの進化は終わらない。かつてはプロフェッショナルレスリングの一派であったU は今では総合格闘技として完全にジパングに根付いている。U の歴史は永遠に不滅です、とは南条彰の言葉である。確かに、選ばれしものの恍惚と栄光を唯一手にした彼の格闘家としての遺伝子は、確実に第 4 世代以降に引き継がれている。U スタイルは現在進行形だ。いつかギリシアのパンクラチオンを現代に復興させた総合格闘技の試合がジパングで行われるとしたら、それはU の群像たちのおかげである。U はジパングに文化として根付き、かつてジパングで発生したクレイジー柔道よりも、支持されるに至っている。むしろ、U はクレイジー柔道の技術すら取り込んで、U スタイル総合格闘技としてジパングの文化そのものと融合しているのだ。

Uの群像

著　者　　夏木康志

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社